

5月の短歌

渡邊麗加

遠き麦笛

自宅から西へ5、6分もあるいてゆくと、道はゆるやかな下り坂になり、そこから姿川の土手まで広く麦畑が続いている。
雲が低く垂れこめ、白いおぼろ月が遠くに滲んで見える。

ほら、あれが満月だよ！

今夜はおぼろ月だよ！

私は懸命に空へ向かって指をさす。

でも駆けだしていった子供たちの姿はもう見えない。

遠くで麦畑が鳴った。ピーーツと低く太い音、

今度はすぐ近くピーーツと高い音

また遠くで麦畑が鳴った。ピーーツピツ…。

ここにいるよと呼ぶ幼き者たちの麦笛が、白い闇のなかに
遠く聞こえる夜である。

① 駆けゆきて麦畑に散る子の影を

追えば月夜の遠き麦笛

一月の夜の麦笛は、過去とも現とも分けがたく耳に届く。子らの影が生き生きと動き、作者を郷愁の世界へ誘う。

② 口笛を吹けぬ少年が寝転びて

弟を蹴る夏草の原

③ 口笛を吹けぬ少年を愛しみぬ

哀しみを放つ笛の明るさ

④ よろめきつつこぎ出す自転車の子の背中を

手で支えれば筋肉動く

— 自転車の練習だろうか。子の背中を押える手に伝わる
動きがリアルで、巧みな表現力である。

⑤ 川の面のきらめきの中に頭ちこくる

子らは永遠に夏の口のま

⑥ 屋根の上に上りたしと言い少年が

裸足で来たり立春の朝